

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を事務所に掲示している。小布施のホームで職員がみんなで考えた理念も事務所に掲示してある。	法人の理念、ホーム独自の理念については事務所内に掲示している。方針理念については毎朝申し送り時に唱和し共有と実践に繋げている。また、全体会議の席上ではホーム理念の唱和を行っている。職員は理念の持つ意味を良く理解し自分の家族のように優しく寄り添うと共にできることは皆で話し合いながら次に繋げている。家族に対しては利用契約時に理念について説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	地域ケア会議や研修で、他の事業者と密に連携をとっている。また、『子どもを守る家』の委託を受けている。北岡地区の川掃除にも参加している。	開設以来区費を納め回覧板も回っていたが、地域の情報を得て参加出来る行事については参加するなど地域の一員として活動してきたが、新型コロナ禍が長引き多くの行事が中止の状態となり残念な状況が続いて来た。そうした中、地区の川掃除に参加したり、春と秋の交通安全週間には地域の子供達の通学時間に合わせ見守りと横断旗振りに参加している。正月行事の「どんど焼き」についても隣の広場で行われるので窓から見学している。また、各種ボランティアの来訪についても町社会福祉協議会と相談の上再開する予定を立てている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナウイルスの影響で、今まで地域の人々と関わる機会は少なくなっていたが、これから徐々に地域の人々と関わる機会を増やしていく予定。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルスの影響で書面開催としていた。今後は、運営推進会議をホームで開き、メンバーにも参加してもらう予定。書面開催した場合、参加予定のメンバーに議事録を届けている。	通常であれば2ヶ月に1回、偶数月に対面での会議を開催しているが、新型コロナ禍が長引いたことからホーム内で検討し書面を作成して、家族代表、区長、民生委員、近所の方、町福祉グループ担当職員、地域包括支援センター職員に届け、意見や助言を頂きサービスの向上に繋げている。今年度、8月より、対面での会議開催を予定している。また、新たな会議メンバーの参加を予定しており、充実した運営推進会議にして行きたいとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域ケア会議や研修で、市町村の情報収集に努めている。会議が中止になった場合は、メールなどで常に連絡をとっている。	月1回開かれる地域包括支援センター主催の地域ケア会議や各種研修会には積極的に参加し、また、連携も図っている。町の担当部署である福祉グループとは各種の報告やコロナワクチン接種等で連携を取っている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し、職員が利用者の現況について細かく情報提供を行っている。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修にて学んで、日々のケアに活かすよう努力している。転倒の危険がある利用者については、人感センサーやフットセンサーで対応している。虐待・身体拘束防止委員会を設置している。	日頃から拘束のない支援に取り組んでおり、現在、身体拘束の必要性のある利用者はいない。また、外出傾向の強い方もいないが、玄関は防犯上の安全確保のため施錠している。更に、家族と相談の上、転倒・転落を防ぎ安全に過ごしていただくため足元センサーを使用したり、人感センサーを使用している方がいる。年2回、身体拘束の研修会を行い、3ヶ月に1回開かれる身体拘束適正化委員会では拘束についての意識を高め拘束ゼロに向けて支援に当たっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内研修(全体会議)にて学び、実践に努めている。虐待・身体拘束防止委員会を設置している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については、内部研修(全体会議)で学んでいる。現在、成年後見制度を利用している利用者はいない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規利用者の受け入れの際、十分な説明や話し合いにより安心して利用出来るようにしている。また、入居説明時に解約や退居に関する説明を十分行うことで、実際の退居時に不安なく退居して頂けた。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	1人ひとりの利用者とのコミュニケーションを取り、率直に気持ちを表現して頂き傾聴に努め、すぐに要求に応じる努力をしている。家族からの意見や要望にもすぐに対応できるように努めている。毎月、家族宛にお便りを送り、普段の様子や健康面などを定期的に報告している。	家族から聞いた情報を参考に、日々の関わりの中でコミュニケーションを図りつつ利用者一人ひとりの力量を把握し、楽しい生活を送っていただけるよう支援している。家族の面会については新型コロナの5類移行後、事前に予約を頂き居室において短時間の面会を再開している。そうした中、ホームでの生活の様子は毎月発行されるホーム便り「ヒューマンヘリテージ小布施」でお知らせし、一人ひとりの生活の様子については生活全般を管理者より、体調面については看護師よりお知らせし家族から喜ばれている。また、コロナ禍中は家族に集まっていたことが難しかったが、今後は感染状況を見ながら敬老会等に集まっていたけようにしたいとの意向を持っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々、職員と良いコミュニケーションを図り、自由に職員の意見が言えたり提案を取り入れ、働きやすい環境作りに配慮している。不安なことがないか常に相談に乗っている。半年に一度、個別に面接している。	月1回職員会議を行い、運営全般についての検討、各種研修、カンファレンス、意見交換等を行い、業務内容の向上や改善に繋げている。年2回、賞与に合わせ、目標に対する自己評価を行い、管理者による個人面談も行い意見交換の場とし、モチベーションアップに繋げている。結果は管理者より本部に上げられ法人の運営にも反映するようになっていく。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者や職員の要望にできるだけ答えて頂ける誠実さがあり、率直に話し合いが出来る場を設けてくれている。本社から職員への面談に来て意見を聞いてくれることがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナウイルスの影響で研修に参加するのは難しかったが、オンライン研修を受けたり、研修内容を回覧したり、研修内容を共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルスの影響で、直接訪問したり交流することは難しかったが、連絡は密に取り合っている。ヒューマン内での勉強会などで、他の職員と交流することもあった。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人がリラックスして、安心して自分らしく過ごして頂けるよう本人の言葉を傾聴し、動作や表情から心情を察することができるよう、小さな気付きを共有し、素早く対応できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の入居申し込みの時点で困っていることや、不安なことを聞いている。入居時に更にご家族に細かく聞く事で安心して入居できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅のケアマネと十分に連絡を取り、情報収集に努め引き続きケアを継続し、まず必要支援を十分に行えるように努めている。家族に事前に聞き取りをしたり、本人と話をしたりして、支援につながるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が“必要とされる”ことに喜びを感じてお手伝いをしたいと思った時は、一緒に作業をして、やりがいを感じて頂く。感謝とねぎらいの言葉を伝え、持ちつたれつ関係を築いている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の生活の様子、体調の変化の際は、電話か面会に来た時など、その都度お知らせしている。ご家族と電話で直接話す利用者もいる。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	日々の会話やレクリエーション、歌を歌う際、回想法実施時、馴染みの人や場所を思い起こしてもらい懐かしんで頂いている。	新型コロナ禍で友人、知人の面会は現在も自粛している。そうした中、ホームの電話を使用して家族と連絡を取り合っている利用者がある。また、職員と共に食材の買い出しに出掛ける方もいる。更に、職員と共に手作りの「暑中見舞いはがき」「年賀状」を家族に郵送し好評をいただいている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	コロナ時は、ソーシャルディスタンスを保ちながら、距離をとってでもできるレクリエーションを行っていた。最近は、ホールでみんなで歌を歌うことが増えてきている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居した利用者のご家族から暖かい言葉を頂いている。退居後もご家族から相談されることもあり、交流は続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の口にする言葉に耳を傾け、その中から本人の意向を汲み取る努力をしている。また、それを記録に残したり、カンファレンスに活かしたりケアプランに反映している。	自分の意思を伝えることが難しい利用者が数名おり、二者択一も含め簡単に応え易いように興味のある物などを提案し希望に沿えるようにしている。発した言葉や気づいた行動等は個人記録にまとめ、出勤時に確認し日々の支援に役立てるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に入居者の基本情報を家族から聞き取り、作成し、より本人の希望を叶えられるように努めている。また、入居前に本人が使っていた物をできるだけ持って来て頂くようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	残存能力の把握と確認・心情の変化・通常と違う言動や行動をした場合等、記録に残したり連絡のノートに記入したりして職員全員で把握し、分析して、ふさわしい対応ですぐに応じられるように努めている。それをカンファレンスやケアプランに反映している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各利用者の担当職員がカンファレンスシートを作成し、それをもとに職員全体でカンファレンスを行う。そのカンファレンスや本人や家族の意見をもとにしてケアプランを作成している。ケアプランは記録用紙と一緒にファイルしており、いつでも見られるようにしている。	職員は1~2名の利用者を担当し、居室管理、モニタリングを行い、アセスメントシートも作成し、更新時にあわせカンファレンスで話し合い、管理者と主任がプランの作成を行っている。入居時は家族から頂いた情報を基に暫定で1~2か月の暫定プランを作成し様子を見て本プラン作成に繋げている。プランの見直しは短期目標3ヶ月、長期目標6ヶ月で行い、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い一人ひとりに合った支援に繋げている。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録とケアプランを一緒にファイルすることで、毎日ケアプランに添った介護を行っているか確認できるようにしている。ケアプランをもとに日々の個人記録に事実の観察項目や言動を記入し、実際に対応した内容と得た情報を記入している。また日々の変化等も記録や連絡ノートに記入し、職員間で共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	役所の手続きの代行、病院への付き添い、本人希望による買い物代行等、ニーズに合わせて対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウイルスの影響で、利用者は外出することが難しかったが、徐々に外出掛けることが増えてきている。今年は、お花見やバラ公園にお出掛けした。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族が対応できない場面が多く、職員がゆだねられ受診の付添いや主治医との連携を密にとっている。主治医が月1回ホームに往診に来ている。一人の利用者は家族が鍼灸院に連れて行っている。月1回、協力歯科医と歯科衛生士が来所し口腔指導を受けている。	利用契約時に医療機関についての希望を聞きホームとしての取り組みを説明している。現在、入居前からのかかりつけ医利用の方は若干名で往診での対応となっている。また、他の多くの方はホーム協力医の月1回の往診で対応し、オンコール対応も可能となっている。ホームには非常勤の看護師が勤務しており利用者の健康管理と医師との連携を図っている。歯科については月1回、歯科医と歯科衛生士の来訪があり、口の健康にも力を入れている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護師が1名職員として勤務している。『看護師との連絡ノート』があり、看護師不在時の利用者の変化や情報・相談・報告のやり取りをしていて、職員はこのノートを毎日確認してから仕事に入る事になっている。必要があれば受診をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	去年は7名の入院があったが、入院前の様子や情報を伝えたり、ドクターからの説明を家族と一緒に受けたりし、安心して入院できるように努めた。入院中、病院との連絡なども密に行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の対応は、それぞれの家族や主治医と相談の上、決定している。その際、家族に十分に説明し、家族の希望に添えるよう努め、ケアプランはその都度見直している。今まで19名の利用者を看取っている。主治医は24時間対応してくれている。	重度化・終末期に対する指針があり、利用契約時に説明し同意を頂いている。食事や入浴が困難な状況になり終末期を迎えた時には、家族、医師、看護師、ホームで話し合いの場を設けている。家族の意向を確認してから改めて看取り同意書にサインを頂き、医師の指示の下、看取り支援に取り組んでいる。看取り介護に入った場合は職員が24時間きめ細かな介護が出来るよう居室よりホールに移っていただき、他の利用者も含め声掛けをし心のこもった支援に取り組んでいる。開設以来20名ほどの方の看取りを行い、新型コロナ禍の中でも家族にはホールで共に過ごしていただき感謝の言葉を頂いている。また、年2回、管理者が講師となり看取りの勉強会を行い看取り支援に備えている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアルがあり、すぐに取り出せ、見られるようになってる。また、全体会議でもターミナルケアや緊急時の対応など学んでいる。実際に、急変や事故発生時に適切に対応できている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身に付けるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者立ち合いで職員による避難訓練を年に2回行っている。昼と夜を想定した避難訓練を水害時、地震時、火災時を想定して避難訓練をしている。町の防災訓練にも参加している。今年中に2回、避難訓練を行う予定。	消防署へ届け出の上、日中想定と夜間想定での避難訓練を行う予定である。水害、火災の避難訓練では2階への垂直避難訓練を行う予定である。また、地震想定ではホールの吹上部分まで移動しての避難訓練を行う予定を立てている。合わせて通報装置を使っての通報訓練も予定している。備蓄については「缶詰め」「おかゆ」「レトルト食品」「水」「カップラーメン」等、賞味期限を確認しながら2日分が蓄えられている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	1人ひとりの利用者とのコミュニケーションを取り、率直に気持ちを表現して頂き傾聴に努め、すぐに要求に応じる努力をしている。家族からの意見や要望にもすぐに対応できるように努めている。毎月、家族宛にお便りを送り、普段の様子や健康面などを定期的に報告している。	利用者との会話を大切に、一人ひとりの利用者を理解することを心掛け、本人の希望に応えられるようにしている。声のトーンに気を配り大きな声はきつめに聞こえるので耳の不自由な方には筆談も交えながら接するようにしている。人生の先輩として尊敬の念を込め、言うてはいけないことについては職員同士その場で注意し合い、気持ち良く過ごしていただけるようにしている。呼び掛けは本人や家族に希望を聞き、苗字か名前を「さん」付けでお呼びしている。年1回プライバシー保護に関する勉強会を行い、意識を高め、支援に取り組んでいる。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	1人ひとりに優しく豊かな接し方をしている。敬語をおり交せて話し、尊敬の気持ちを忘れずに対応している。必要があれば居室で1対1で話を聞く事もある。			

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の意見や希望を否定せず、最後まで傾聴している。本人が恥ずかしくて言いにくい事も日頃から良いコミュニケーションを取り、言いやすい関係作りをしている。居室で過ごしたい利用者は居室で過ごして頂いている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型にこだわる利用者には本人からの希望があれば、希望に添ったヘアカットを行っている。自分で洋服を選んでいる利用者もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者がお盆拭きに参加している。参加できない方も料理の話をしたり、食事の準備を見たりして楽しんでいる。誕生日のケーキやホットケーキなど、手作りすることもあり、利用者を手伝って頂くこともある。	自力で摂取できる方が三分の二強、一部介助の方と全介助の方がそれぞれ若干名ずつとなっている。献立は昼食、夕食の副食については季節感が加味された配食会社の食材を使い、汁物、ご飯についてはホームで調理して提供している。正月には「おせち料理」をお出しし雰囲気を楽しんでいただき、夏祭りには「スイカ割り」や「かき氷」で季節感を感じていただいている。また、おやつについては「ニラ煎餅」「ホットケーキ」「パンケーキ」「水羊羹」等の手作りおやつを楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	現在は配食サービスを昼食と夕食のみ利用している。栄養を取り入れられない方については、食事量、水分量、体重をチェックし、摂取しやすいように刻み食、ミキサー食、好きな食品など提供し、他には栄養補助食品で補っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	月1回、協力歯科医と歯科衛生士が来所し、口腔指導を受けている。適したケアができるよう、スタッフ間で情報を共有している。義歯は毎日消毒している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	気持ち良く排泄できるよう定期的にトイレ誘導し、ゆとりある仕方でも尿を待つよう支援している。排泄状態に合わせたパッドの当て方や方法などを常に検討している。	利用者一人ひとりの状態に合わせて小まめに支援している。一部介助でリハビリパンツとパットを使用している方が三分の二強となっている。また、全介助でおむつ使用の方は若干名で、日中は3～4時間で交換し、夜間は2回交換し気持ち良く過ごしていただけるようにしている。バイタルチェック表の中の排泄の欄も参考に、職員は一人ひとりのパターンを把握し、食事やおやつ時の定時誘導と合わせ、一人ひとりの様子を見て落ち着きがなさそうな時は早めにトイレに誘導している。排便については3～4日間ない場合コントロールを行い、1日の水分摂取量を1,000cc以上として取り組んでいる。また、排泄用品の1日の使用量を掴み、費用削減にも取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各自の排泄パターンに合わせて水分の調整、下剤の使用調整をしている。乳製品は毎日飲むようにしている。運動不足解消に軽い体操を行っている。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	各自定期的に入浴し、汚染時や皮膚のトラブルがある方は、その都度清拭や陰洗などで対応している。必ず週2回以上は入浴を行っている。入浴以外では、陰洗や清拭も行っている。	一部介助の方が三分の二強、全介助の方が若干名という状況である。基本的には週2回入浴を行っている。入浴拒否の方がいるが誘い方に工夫をして入浴をしていただいている。また、ターミナルケアの利用者が出た場合は、週2回、看護師が全身清拭で対応し気持ち良く過ごしていただくようにしている。入浴剤を使用し、「ゆず湯」「リンゴ湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	1人ひとりの希望や、スタッフが観察して休憩が必要と思われる時は、ホールの居間にベッドが設置しており、いつでも休めるようになっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	最新の薬の情報を入れたファイルがあり、職員全員が閲覧できるようになっている。症状の変化があった場合は、看護師がドクターと相談の上、処方してもらっている。薬が変わった場合、連絡ノートに記入して職員全体に周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	やりがいや自分の居場所を見つける事で生きがいを感じてもらうために、家事の手伝いをお願いしている。秋には栗拾いを行っている。絵を書いたり歌を歌ったり、各自でできる範囲で日々のレクリエーションを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルスの影響で外出は難しかったが、今年はお花見やバラ公園にお出掛けしたり、利用者と一緒に買い物に行ったり、外出する機会が増えてきている。	外出時、自力歩行の方とシルバーカー使用の方がそれぞれ若干名ずつで、車いす使用の方が三分の二となっており、一人ひとりに合わせ支援している。天気の良い日にはホームの周りを散歩したり日当たりの良いテラスに出てお茶を飲みながら外気浴を楽しんだり、秋には周りの栗畑で「栗拾い」を楽しんでいる。新型コロナ禍で外出を自粛していたが、今年の中野の一本木公園にバラ見学に出掛けたり、小布施ミニマラソンの応援を窓越しでしたりして楽しんだという。今後は新型コロナの状況を見ながら計画を立て、季節に合わせた外出を行う予定である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族から預かったおこづかいはホームで管理している。通常以外の買い物は、家族の承諾を得ている。おこづかひの明細や領収書は月1回、各家族に送っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族と話したいと希望する利用者には職員が電話し、本人と代わって家族と会話をしてもらっている。家族や親戚からの手紙も本人に渡すか、読み上げている。年賀状は1人ひとりが一言書いて家族に出している。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	エアコンやファンヒーターも完備しており、適度な温度・湿度管理をしている。リビングも暖かい雰囲気になっており、壁には利用者が書いた習字などが飾られている。	周りを町特産の栗畑に囲まれた静かな環境の中に洋館風の当ホームが建っている。玄関を入ると顔写真入りで職員が紹介されている。共用部分の居間や食堂は天井が拭き抜けとなり開放感がある。居間の陽当たりの良い掃き出し窓から外に出ると外気浴等、寛ぎの場として利用している広いテラスが設置されている。廊下の壁には利用者の作品が飾られ活動の様子を見て取ることができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	楽しく会話したりテレビを見たり、レクリエーションを楽しめるように配置している。また、休みたい人はホールのベッドで横になって休むことができるようになっている。ホールと居間は、カーテンで仕切れるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室にはトイレ、洗面所が設置されている。使っていた家具やテレビなどを持ち込んでいる利用者もいる。	整理整頓が行き届いた綺麗な居室には大きなクローゼット、トイレ、洗面台が完備され、プライバシーにも配慮がされ暮らし易い造りとなっている。持ち込みは自由で、家族と相談の上、イス、テーブル、衣装ケース、テレビ等が持ち込まれ、家族の写真や好きなヌイグルミ等に囲まれ、思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物をたたんでもらったり、おしぼりや洗濯物を干すのを手伝ってもらったり、ほうきで掃き掃除をしてもらったり、毎日の仕事に安全に配慮しながらできるかぎり携わって頂いている。		